二種類ある偶像礼拝の罪

２０１６年１２月 25 日
西九州伝道所
佐々木正明

聖書は偶像礼拝が罪であると教えています。単なる罪ではなく、神がもっとも忌み嫌われる罪であると教えています。それでクリスチャンたちの多くは、徹底して偶像礼拝を避けるように指導されてきました。日本人クリスチャンも例外ではありません。日本の宗教は偶像教であると教えられたために、忠実なクリスチャンたちは日本の宗教を敵視し、嫌悪感を露わにして、少しでもそれらに接触することがないように、注意深く避けてきました。

ただほとんどのクリスチャンは、宣教師や牧師などの伝道者を含めて、偶像礼拝の罪にはふたつの種類があることに気づいていません。そのために、日本の宗教やそれらの宗教を奉じている人たちに対して、間違ったお付き合いの仕方をしてきたことも少なくありません。それが、日本という文化土壌のなかで生きなければならない、日本のクリスチャンの生活をことさら難しいものにしてきたことも事実です。

さらに、偶像礼拝についての間違った理解のために、この日本に生まれ育った人たちに福音を伝えようとするとき、私たちは非常な困難に直面してきました。そのような体験を二度三度と繰り返すと、もう自分には福音伝道どころか、証さえ満足に出来ないと思い込んでしまいます。しかしこの偶像礼拝に関する聖書の教えを正しく理解して、その上に立って生活と証をしていくならば、必ず異なった展開が開けてくると確信するものです。

偶像礼拝の罪の二つの種類とは、①　出エジプト記２０章に記されている十戒の、第一戒である偶像礼拝禁止の命令を破る罪と、②　ローマ書１章１８～３２節に記されている、偶像礼拝の罪です。この二つは同じ偶像礼拝を取り扱っていながら、実はかなり異なっています。

Ｉ．　十戒の第一戒として与えられた偶像礼拝禁止の律法

出エジプト記２０章に記されている十戒の、第一戒に挙げられている偶像礼拝禁止の命令は、そのまま日本の宗教やそれを奉じている日本人にも適用され、日本人は偶像礼拝者

であり、神の怒りのもとにあると断罪されてきました。その上、旧約聖書に幾度となく繰り返されているイスラエルの偶像礼拝の罪と、そのつど下される神の厳しい刑罰の歴史が持ち出されて、偶像礼拝に対する神の峻厳な態度に注意を促されてきました。

　ところが、正しく聖書を学ぶと、この出エジプト記に記されている十戒をはじめとし、旧約聖書の多くの戒めを直接日本人に適用するのは、大きな誤りであることに気づきます。これはむしろ非常に簡単というか、単純というか、聖書を素直に読むならば誰にでも分かることです。ただ私たちは、ずっと尊敬する西欧の宣教師に教えられ、西欧で発展した聖書の解釈によって導かれて来たために、それを疑うことなく鵜呑みにしてきたのです。西欧の「キリスト教文化」に生まれ育ってしまうと、これを正しく理解するのは困難なのです。

　十戒をはじめとする旧約聖書の多くの戒めは、イスラエル民族という特殊な民族に与えられた法律であって、イスラエル人とはなんの関わりもない私たち日本人に、そのまま、直接、適用してはならないものです。フランスの何とか言う町には、「この町で死んではならない」という奇妙な法律があるそうです。土葬にする土地が無くなってしまったという特殊な事情が、そのような定めごとを作らせたのだそうです。そのありがたいようなありがたくないような法律を、私たち日本に住む日本人に、直接当てはめる人はいません。十戒で初めて与えられ、それからしばしば繰り返された偶像礼拝禁止の戒めは、イスラエル人に対する法律であって、日本人に対するものではありません。

Ｉ．A.　偶像礼拝禁止の大前提

　十戒に命じられている偶像礼拝禁止には、大前提があります。つまり、それが崩れれば命令自体が成り立たないという条件です。それが偶像礼拝禁止の条例の直前に、間違えるはずがないほど「明瞭明確」に述べられています。ところが、日本人の偶像礼拝の罪を語る多くの人たちは、いつもそれを完全に無視しているのです。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」これが大前提です。まず、「私はあなたの神、主である」と宣言されていますが、偶像礼拝を禁じた方は、「私はあなたの神」ということが出来、「あなたの主」と言い切ることができた方です。すでに、「あなたとわたし」という関係に入っているのです。日本人は、聖書が教える神とはこのような「あなたとわたし」の関係には入っていません。枠外なのです。ここで言われる「あなた」ではないのです。

　この関係は、「あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した」という、決定的な出来

事によって作られた関係です。それは神が多くの民族の中からイスラエル民族を選んだ出来事に根ざし、その民族がエジプトの国で奴隷になっていたのを神が数々の奇跡をもって、救出し、約束の地に導き登っておられた事実に立っているのです。日本人は、そのような事実を背景にしている民族ではありません。

イスラエル人は、ただ、アブラハム、イサク、ヤコブの神と呼ばれた先祖の神を信じていただけではなく、彼らの目の前で数々の大きな奇跡を行って、彼らをエジプトの奴隷の枷から解き放ってくださった、救いの神、助けの神、力強い神を体験していたのです。エジプトを出てからも、昼は雲の柱夜は火の柱で導き守り、紅海の水を二つに分けて道を開き、彼らを安全な土地に渡らせた上に、エジプトの軍隊を全滅させてくださった神、苦い水を甘い水に変えてくださった神、攻めてくる土着の民族を奇跡によって打ち負かしてくださっただけの神ではありません。砂漠の中で充分な肉とパンを与えてくださった神、以前に与えてくださったことがある「過去の神」ではなく、十戒が与えられたその時も、肉とパンを誠実に与え続けておられた「今の神」、毎日体験していた今日の神なのです。

その神が、イスラエル民族と特別な契約関係を結んで下さり、それを一般民衆までに明らかにされようとしておられたのです。天地の創造者がイスラエル民族と、夫婦関係、婚姻関係に喩えられる関係に入られたのです。それで、「あなたの神、あなたの主」という表現が力を持つのです。それで、この神を離れて他の神に行くことを、聖書は不定の妻、姦淫の女に比べているのです。不定の妻を愛し続け許し続ける夫が神の姿を表し、繰り返して夫を裏切り続ける奔放な妻が、イスラエルを表現するというわけです。この神の姿を、身をもって現すことを命じられたのが、淫乱な妻を持たせられたホセアという「気の毒な」預言者でした。

つまり、神はイスラエル民族をご自分の妻と見立て、偶像礼拝を他の男に走る淫らな妻の浮気心に見立てて語っておられるわけです。神は大きな奇跡をもって、この女を惨めな奴隷状態から救い出し、ご自分の妻として愛されたのです。だから、私はあなたの夫、あなたを救い出したもの、私以外の者に走ってはならないと仰せになり、彼らを愛し、彼らを幸せに出来るのは自分だけだと、訴えておられるのです。

したがって、神の奇跡を見せられていない人々、神によって奴隷の状態から救い出されていない人々、神との特別な契約関係に入れられていない人々、「神の妻」とされていない人々は、この、偶像礼拝禁止条約、不貞禁止条約、現代的に言えば不倫禁止の法律にふれることはないのです。結婚していないからです。天地創造の神と「婚姻関係」に入っていない日本人が、不貞の妻として訴えられ裁かれ刑罰を与えられることはないのです。

たとえ日本人が偶像礼拝をしていても、イスラエル民族が叱責されたように叱責され、彼らが罰せられたように罰せられることはないのです。それなのに、日本人をイスラエル人と同じ立場に立たせて、偶像礼拝の罪を責め立てる宣教師や牧師は間違っているのです。確かに日本人も偶像礼拝をしています。だからといって、十戒が与えられたあとのイスラエル人のように責められてはならないのです。イスラエル人は、神の明らかな自己顕現、自己紹介だけでなく、明らかな助けを体験しているからです。

Ｉ．B.　十戒が与えられる前のイスラエルの偶像礼拝

同じイスラエル人の偶像礼拝に関してでさえ、十戒が与えられる前の偶像礼拝は、厳しく罰せられていません。イスラエル人の先祖であるアブラハムは、シュメール文化の中に生まれ育ったようですから、シュメール人の宗教と信仰生活に馴染んでいたはずです。初めから天地の創造主を信じていたとは考えられません。ところがそのような偶像礼拝者であったにも拘らず、神は彼の信仰心と生活態度をご覧になって、彼にご自分を現して、ご自分の大切な器としてお選びになったのでしょう。

アブラハムは天地の創造者を自分が礼拝するべきお方として定め、このお方だけを礼拝し、また仕えるようになったようですが、他の神々の存在やそれらを礼拝する人々の存在を否定したのでも、責め立てたのでもありません。ただ、自分が礼拝しお仕えするのはこのお方だけと定めただけです。アブラハムが持つことができた天地の創造者についての理解は、現在の私たちからすると甚だ希薄なものだったに違いありません。天地の創造者であるとさえ、理解していなかったと思われます。しかし彼の理解は頭脳による理解ではなく、お付き合いを通しての知識、体験を通しての理解であり、ちょうど幼子が親を知っているのと同じ性質のものでした。その点に於いて、現代の私たちには及びも付かないほど高く、また深い理解を持っていたのです。

この天地の創造者を信じる信仰は、多分、少しずつ、他の神々に対する考え方や取り扱いに影響を及ぼしたことでしょう。ちょうど、現在のクリスチャンたちでも、たとえ偶像礼拝について何も教えられなくても、いつの間にか、様々な偶像礼拝を退けるようになるのと同じです。その過程においては、いろいろな間違った神観念もあったことでしょう。明らかな偶像礼拝もあったはずです。

アブラハムの孫にあたるヤコブが愛した妻、ラケルは父ラバンの家を離れるとき、自分たち一族の偶像を盗み出しています。彼らは偶像礼拝者だったのです。ヤコブが自分の一族の中から偶像をみな取り出して、樫の木の根元に埋めた一種の宗教改革は、祖父アブラ

ハムが神に召し出されてから、およそ１５０年も経ってからの出来事です。神は、偶像礼拝に対しても案外忍耐深く構えておられたのです。この１５０年は、プロテスタント・キリスト教が日本に入ってきてから、今日に至るまでの年月とほぼ同じです。私たちは日本人の偶像礼拝を、十戒が与えられた後のイスラエル人を責めるような勢いで、責めてはならないのです。

イスラエル民族に対しては、神はさらに天地創造の物語を通して、非常に明快な自己紹介をして下さり、ご自分が、周囲の民族が礼拝していた神々とは根本的に異なる、まったく次元の異なるお方であることを教え、多くの歴史的出来事をもって、その事実を実証してくださっています。ですから、イスラエル民族の偶像礼拝の罪は殊更に重く、神の刑罰は特別に厳しいのです。天地の創造者である神について何も知らない、無知で「愚かな人間」の偶像礼拝とはまったく違うのです。

Ⅱ．　ローマ書１章に記された偶像礼拝の罪

モーセの十戒の一部としてイスラエル民族に与えられた、偶像礼拝禁止の命令を破る罪と、ローマ書１章に記されている偶像礼拝の罪を、同じ土俵の上の相撲のように語ってはなりません。偶像礼拝という主題は同じでも、土俵が違うのです。同じように組み合って戦うスポーツでも、丸い土俵の上で戦う相撲と畳の上で戦う柔道を、同等に語ることはできないのです。

Ⅱ．A.　すべての偶像礼拝者に対する罪の宣告

端的に言うと、十戒の偶像礼拝の問題はイスラエル民族の問題であって、日本人には適応できません。一方、ローマ書１章で取り扱っている偶像礼拝は、イスラエル人をも含めた人類全般の偶像礼拝なのです。従って、日本人はこのローマ書１章の１８～３２節の記述に従って評価されなければなりません。

ローマ書で言われる偶像礼拝の罪とは、神が自然物を通してご、ご自分について知りうることを明らかにしておられるにも拘らず、人間は明らかにされた神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性、不滅の栄光を、滅ぶべき人間や、鳥や、獣や、這うものの形に変えてしまった罪です。これは、夫婦関係の不貞になぞらえる事ができる、イスラエル民族の偶像礼拝の罪に先行する、もっと根源的な偶像礼拝の罪で、偶像礼拝をしている全民族、地上のすべての人々に及ぶものです。

Ⅱ．B.　　第二の堕落

この偶像礼拝は、いわば、人類が神から遠ざけられた罪の「二つ目」というべきものです。あるいは、アダムとエバが犯した罪による堕落に続く、「第二の堕落」とも言えるものです。この罪のために、人類は「心の欲望のままに汚れに引き渡され」、「恥ずべき情欲に引き渡され」たのです。そのために、人間はありとあらゆる「してはならないことを」するようになったのです。ローマ書１章の最後の部分では、２１の「してはならないこと」が、列挙されています。つまり、人間が罪に汚れたのは、アダムとエバによる罪の結果だけではなく、偶像礼拝の罪のためだと説明されているのです。この第二の堕落は、まず人間の性本能の錯乱となって現れたようですが、それだけには留まらず、人間のあらゆる欲望に及んでいます。

Ⅲ．偶像礼拝の罪の背景

偶像礼拝にはいくつかの段階、あるいは背景があります。その第一は、人間に与えられている本能です。偶像礼拝は人間の本能に直接関連しています。人間は神に似せて造られ、はじめから神との交わりを求めるように、神を礼拝するように、また祈るように造られているのです。宗教性は神が人間に与えてくださった本能、霊である神に似せて造られた人間の霊的本性の現れです。

この人間の宗教本能は、アダムの罪による堕落でも失われませんでした。だからこそ神は、その失われていないという事実に立って、神から追放され神を忘れかけている人間に対し、自然物を通してご自分を示し、人間が改めてご自分を知ることができるようにされたわけです。言い換えると、人間が宗教を持つこと自体を悪と決め付けてはならず、むしろそれは神が与えてくださった本能の発露と考えるべきです。

問題は、神が自然物を通してご自分を示してくださっているのに、人間は神を正しく理解することができなかったことです。これが第二の背景です。ですから偶像礼拝を憎むあまり、人間の本源的欲求である宗教性まで叱責するのは間違いです。ただ何を礼拝するか、誰を拝むかに問題があるのです。赤ちゃんが焼酎を飲んではいけません。飲ませてはなりません。しかし、赤ちゃんが持っている「飲む」という本能まで否定してはならないのです。

ローマ書の記述によると、人間は自然物を通して神を知っていたのです。ローマ書の著者パウロは、アテネでの説教の中でも、神は人々にご自分を求めさせるように仕向け、人が「もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともある」ようにしてくださったと語っています。ローマ書で彼が言う「神を知る」という事は、もちろん、神について何

から何までも理知的に知るという意味ではありません。むしろ極めて原則的、あるいは基礎的なことを、本能的に理解することです。少なくても、人間は自然を通して神が目に見えない方であることを理解すべきだったのです。パウロは、目に見えないものは永遠であるとも語っています。目に見えないからこそ無限なのです。

それなのに人間は、無限の神を無限の神として崇めずに、偶像を作って有限の神に代えてこれを礼拝したのです。これが第三の背景です。繰り返しますが、人間は、神について全く何も知らずに偶像礼拝に陥ったのではないのです。むしろ神が、人間にわかるように自然を通してご自分を啓示してくださり、人間はそれによって神についての基本的なことを理解できたにも拘らず、あえて、愚かな偶像礼拝に陥ったのです。だから、人間には言い訳の余地がないと糾弾されているわけです。もちろん、キリストの十字架による贖いについては、自然を通しての啓示によっては知ることも理解することもできません。それは特別な啓示を必要としています。しかし、「神の見えない性質、永遠の力と神聖」とパウロが言う、極めて基礎的なことは理解できたはずなのです。

Ⅲ．A.　無知な時代を見過ごして来られた神

パウロはアテネでの説教の中で偶像礼拝に触れ、「神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人に悔い改めを命じておられます」と語りました。

Ⅲ．B.　あまり殊更に責め立てるべき問題ではない。

宣教師や牧師たちは、烈火の勢いで偶像礼拝を責め立てて来ましたが、パウロによると、神が長い間見過ごしてこられたほどの問題でもあるのです。すでに触れたように、十戒が与えられる前のイスラエルに対しても、神は偶像礼拝について責め立てるようなことはなさいませんでした。私たちの神は忍耐深いお方です。神が激しく叱責し、厳しく責め立てたのは、婚姻関係にあるイスラエル民族が浮気をして、ほかの神々に心を寄せた時だけなのです。

人類一般の偶像礼拝の罪についてパウロが論じた、ローマ書１章の言及はかなり厳しいものです。しかし、それはあくまでも「論」であって、実際に偶像礼拝をしていた人々に対しては、アテネでの説教の例が示すように、そのような厳しい言い方をしたのではありません。パウロはアテネの町が偶像で満ちている実情に、腹立たしい思いを抱いたことは当然です。しかし、実際に偶像礼拝者たちと話し合ったときは、その偶像礼拝を手蔓にし

て、つまり、話の手始めの共通の話題として持ち出し、決して叱責するような表現はしていないのです。

偶像礼拝は神の栄光を無に帰する重大な罪ではありましたが、それと切り離すことができない人間の宗教性は、非難されるべきではないために、パウロは自分の腹にある偶像礼拝への憤りを隠して、聞いている人々にも一方的な叱責や非難に聞こえないように、理を尽くして語っているのです。私たちが日本人の宗教や宗教心について語ったとき、このような気配りをしていたでしょうか。

Ⅲ．C.　「無知な時代を見過ごしておられた」

アテネの説教でパウロは偶像礼拝に触れて、「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが」と語っています。神様は偶像礼拝を「大目に見て」（新共同訳）おられたのです。人類の偶像礼拝の罪は、原理原則として、決してないがしろにできない問題です。しかしその一方、異邦人の偶像礼拝の罪は「無知の時代のこと」として、大目に見て下さることが出来る程度の問題だったのです。彼らはまだ神の自己顕現、自己紹介を頂いておらず、その助けの力も体験していない「無知」の状態にいたためです。日本人も「無知」なのです。

Ⅲ．D.　「今は」悔い改めを命じておられる

ところが、パウロが語った「今は、すべての人に悔い改めを命じておられる「という言葉の方が、厳しく解釈されて日本人にも適用されています。

まず、「今は」という意味ですが、これはパウロがアテネの人々に天地創造の神について語った、紀元５０年頃のことでしょうか。そのときを境に、すべての異邦人も悔い改めて、偶像礼拝を止めるように命じられたということでしょうか。そうではありません。むしろ、「天地創造の神についての正しい知識が伝えられたとき」と、考えるべきであり、「正しい知識を伝えられたすべての人」は悔い改めるべきだと受け取るべきです。正しい神の理解を持っていなかった異邦人が、天地創造の神についての基本的な知識を与えられたその時が、こぞって悔い改めるべき「今」となるのです。そうだとすると、大多数の日本人にとって、「今」はまだ到来していないのです。

Ⅲ．E.　今は「悔い改めを命じておられる」

次の問題は「悔い改め」という言葉です。ここでパウロが用いた悔い改めという言葉は、

もともと「考え方を変える」という意味のギリシヤ語でした。それが紀元前数世紀から、ギリシヤ文化に取り込まれたユダヤ民族の間で、「悔い改め」という宗教的意味に用いられるようになりました。当時翻訳された旧約聖書のギリシヤ語訳、７０人訳聖書においても、そのような意味で用いられています。

ところがパウロの時代、この言葉が悔い改めという強い意味で用いられていたのはユダヤ民族の間だけで、もともとのギリシヤ人たちの間ではまだ知られていなかったと考えるべきなのです。

パウロは、ギリシヤの影響が強い文化に生まれ育ちました。その中で、この言葉がユダヤ人たちの間で用いられるときの意味と、ギリシヤ人たちの間で用いられるときの意味の違いにも、当然、気づいていたことでしょう。ですからアテネにおいて、ギリシヤ人たちに、あるいは、ギリシヤの知恵を求めて集まってきていた人たちに向かって語ったとき、パウロは、ギリシヤで用いられていた意味で語ったと考えるのが自然です。たとえ、ヘブル的な意味で語ったとしても、聞いた人たちはみなギリシヤ人ですから、ギリシヤ語の意味で理解したはずです。

つまりこの言葉は、「悔い改めて」という宗教的意味合いを持った、厳しい言葉として訳すべきではなく、「考え方を変えて」、あるいはせいぜい、「心を変えて」程度に訳すべきものだと考えます。ただ次の節には「世界をさばくために」という峻厳な言葉が出てきますので、クリスチャン感覚としては、「悔い改め」という訳がピッタリで、疑問を差し挟む余地がないと感じるほどです。

とは言えよく考えると、ルカが記録したパウロの説教は要約されたもので、本来はこの何倍も長かったはずで、偶像の問題からキリストの裁きに至るまでには、ひとつの説教のなかでも相当の時間が必要であり、主題にも展開があったものと思われます。ルカの記述を読むと、偶像礼拝の主題の中に、キリストによる裁き話がいかにも唐突に出てくるのです。いかにパウロは異邦人伝道に不慣れであったとしても、あまりにも突然です。

パウロは異邦人への使徒として、異邦人のための神学の土台を築き、異邦人の土地を巡り歩き、異邦人教会を建てているのですが、実際に完全な異邦人を相手に伝道している例はわずかしかなく、毎日完全な異邦人を相手に伝道を試みている私たちからすると、まさに不慣れです。パウロが性急に話を進めたもうひとつの理由は、多分、この時彼はアテネに留まって教会を建てる計画はなく、すぐに次の目的地に向かって旅立とうとしていたことです。

ともあれ、パウロがこの言葉をどういう意味で語ったかは、今となっては厳密には想像の域を出ませんが、聞いたギリシヤ人がどう理解したかははっきりしています。また、それを記録したルカがどういう理解で書き留めたかも、想像をたくましくできます。ルカはギリシヤ人ですから、もともと「考え方を変えて」の理解でしたが、クリスチャンになってからは、「悔い改め」というユダヤ的用法があることにも、気づいていたはずです。ではルカはどちらの用法を念頭において書いたのでしょう。

ルカが彼の福音書とその続編である使徒の働きを宛てたのは、テオピロと呼ばれた社会的身分の高いギリシヤ人だったと考えると、これはギリシヤ的用法で書かれたものと考えられます。しかし、ルカが、クリスチャンたち一般をテオピロ、すなわち「神を愛するもの」という意味で呼んだと解釈すると、これはヘブル的な意味合いに取ることができるようになります。私たちはギリシヤ人と同じ異邦人ですから、「考え方を変えて」と読むほうが良いように思います。

少なくても私たちは、厳格この上ない神の代弁者として、偶像礼拝を続けるイスラエルを、激しく責め立てて止まない預言者を真似てはなりません。「上から目線」丸出して偶像礼拝者を弾劾する態度をとるべきではないのです。イスラエルの預言者たちが厳しく偶像礼拝の罪を攻め立てたのは、あくまでもイスラエル人だったのです。むしろパウロがアテネで試みたように、偶像礼拝の中にもある異邦人の強い宗教心、神意識を手蔓、あるいは共通の土俵としてねんごろに話を進めるべきです。もちろん、その中に、必然的に結論に近いところで、神の裁きを語ることも当然必要になってくることでしょう。ただし、その裁きでさえも、イスラエル民族に対する裁きと、一般の異邦人に対する裁きとを、混同して語ってはなりません。

Ⅳ.　ローマ書一章の偶像礼拝と日本人

ところで、日本人の基本的宗教意識、あるいはそこから発生している神道というものを、このローマ書の記述に照らし合わせてみるとどうなるでしょう。

Ⅳ. A. 偶像を造らない神道

神道の基本的特徴を挙げるならば、体系的な教え、キリスト教で言う神学がないということと、拝む対象がはっきりしないことです。神学がないのですから、拝む対象がはっきりしないのが当然なのか、拝む対象が明らかではないために神学がないのか、ともかくそれが神道の特徴なのです。そしてこれはたまたまそのようになったのではなく、わざわざ、あえてそのようにしていると言えるのです。

神道は、もともと日本人の心の奥深くの宗教観、あるいは神観を素朴に表現したものです。素朴以上に表現しようとはしないのが、本来の神道です。このような神道に満足できず、体系的な神道を作ろうとして、キリスト教の神学などを参考に作り上げたのが、徳川時代の終わりに現れた復古神道です。これは明治から昭和の初期にかけての、反キリスト教政策の一環として、国家神道の土台とされましたが、現代ではあまり影響力を持っていません。日本人本来の素朴な宗教観、あるいは神観にあわないのです。

神道に神学がなく、拝む対象がはっきりしないということは、神道には偶像が存在しないという、極めて特徴的な事実につながります。多くの日本人は神道にも偶像があると思っていますが、それは通俗的な神道で、堕落した神道、あるいは仏教化した神道であって、神道本来のものではありません。

神道は日本人が本能として持っている、目に見えないもの、すなわち像や絵画で表現することができないもの、あるいは人間の思考と想像力をこえて、言葉でさえも表現できないものにたいする畏れを表現したものです。ですから、拝む対象がはっきりしない、神学がないということと、偶像がないということは根が一つなのです。偶像がないということは、ある意味、拝む対象をも持っていないことであるため、神道は宗教ではなく、日本人の心、日本の文化だと言われるのです。

このように神道が日本人の心の深層に根差した信仰であることを考えるとき、歴史の中で、その本質を体現していたように見える人物たちに目を向けたくなります。その一人が、明治天皇です。このころの天皇はまだ、国家神道という重圧の下、日本人と神との間の大祭司的務め、人と神との間を取り持つ勤めを、日々に果たしておられました。つまり天皇は、今でもそうですが、毎日、日本国と国民の安寧のために、日々祈り続けているのです。その明治天皇が、次のように詠んでおられます。

「目に見えぬ神の心に通うこそ　人の心の誠なりけれ」

これはまさに神道の真髄を現す歌であり、同時に、聖書の神と、その神に似せて造られた人間との深い関係を示しているとも言えます。

またもう一人、特筆すべき人物が西郷隆盛です。日本の歴史上、最も人気のある人物の一人であることは、誰もが知っているとおりです。彼の故郷・鹿児島市の資料館には、彼の大揮毫「敬神愛人」が入口近くに展示されています。西郷は中国語聖書の愛読者であり、「敬神愛人」は「神を愛し人を愛しなさい」と訳されています。彼がイエス・キリストを信じるクリスチャンであったかどうかは定かではありませんが、アブラハムのように、天地をお造りになった神を信じた人物であったことは確かだと思います。そう考えると、彼

が義とされていた可能性は十分にあるのです。日本人として、日本の文化を深く生き抜き、日本人の魂を沸き立たせ、最後は逆賊とされて死んだこの人物が、もしかすると今、アブラハムと談笑しているかもしれません。

神道に神学がないということ、対象がはっきりしないということは、数々の混乱を引き起こし、いわゆる民間信仰、通俗信仰を数多く作り出すことになりました。神学がないのですから、どんな信仰だろうと、間違っているだとか異端だとか、キリスト教のような争いにはなりません。非常におおらかにすべてを包み込んでいながら、神道の本質を失わずにきているのです。宗教的寛容性が神道の性格の一つです。

Ⅳ．B.　神道の中の偶像

　そういうわけで、通俗的な神道には偶像がたくさんあります。特に仏教との混合によって作り出された宗教観は、そこここに偶像を作り出してきました。人間には目に見えないものでは満足できないという弱さがあります。偶像は、目に見えない神をなんとか目に見える形で、表現しようとしたものです。人間の理性を超えた大きな神を、なんとか有限の人間の足りない言葉と知恵で説明しようとしてきた、西欧の神学と根は同じです。

　これは神道的感覚の一部である、汎神論的な感覚につながっています。神道ではすべての自然物、時には人造物の中にさえ、目に見えない神が宿っていると考えます。それは僅かに言い方、表現、あるいは理解を変えると、すぐに、自然は神の姿を現しているとなり、自然は神だとなり、自然を拝むことになります。自然物を神格化して拝む民間信仰は各地に広がっています。拝まれているものも、巨木や奇岩からはじまり太陽に至るまで、偶像礼拝につながっています。

　あるいは、人間の願望を象徴する物を作ったり見つけ出したりして、これを拝む偶像礼拝もあります。たとえば、男性性器や女性性器に似た物体を拝むのは、男女の睦みを願い子宝を願う表現です。とはいえ、このような日本人の自然崇拝から生まれる偶像礼拝は、全体から言えば、宗教心の僅かを占めているだけで、宗教心の中心を占めているのでも大部分を占めているのでもありません。

　このような日本人の宗教心の中心は、日本人が密かに感じ続けてきた、目に見えない大きな方、絵でも像でも言葉でも表現できない、気高く奥深く恵みに富む聖い方に対する、素朴な畏敬と感謝と願いです。そのお方を、無理に言葉や形で表現しようとすると、八百万の神々の神話や民話の世界、あるいは貧弱な偶像礼拝に陥ったりしますが、神道全体としては、やはり、目に見えない畏（かしこ）き方を、良くはわからないまま崇めて行くという本筋を失っていないのです。

神道の内に見られる、すべての自然物に神が宿っていると見る汎神論的信仰は、原則的に聖書の世界観と矛盾しません。特にすべての物に神々が宿るのではなく、単数に近い存在の「神」が宿るという感覚は、聖書の神観と非常に近くなります。神道では神々という複数の存在よりも、唯一と表現されても良いほどの、大きなよくわからない方に対する畏れの方が明らかなのです。

この方は、単に上という意味しか持たない「神」という言葉では、表現しにくい存在でもあるのです。ですから、「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と詠われたのです。

お勧め

日本人に証をし、福音を語るとき、多くの宣教師や牧師がやり続けているような、十戒を水戸黄門の印籠のように掲げて、日本の宗教や日本人の宗教心を卑しめる言い方をやめましょう。むしろ、偶像礼拝の誘惑を強く感じながらそれに陥りきっていない、日本人の宗教的純粋さに敬意を払って語りましょう。神道的感覚を手蔓として、永遠の栄光の神について語ってあげましょう。

今日はキリストの誕生を記念するクリスマスです。聖書には、キリストの誕生を祝うために、東から博士たちが訪ねて来たと記されています。ご存知のように、この人たちはユダヤ人ではなく、博士でもありませんでした。正しくは知恵にあふれた異邦人の占い師だったようです。神は異邦人の占い師たちにも、光を当て、正しい信仰に導いてくださることもあるのです。

筆者の伝道者生涯にも、そのような体験を幾度かしたことがありました。一九六八年のことです。当時貧しい開拓伝道者として、沖縄の山原（やんばる＝北部）の入口、金武村というひなびた村で苦闘していた筆者を、一人の中年の男性が訪ねて来ました。話によると、彼が昔から仕えていた神様が前日に現れて、「金武村の大通りを歩いて、大きな白い十字架が描かれている建物に入って、そこの主（ぬし）から、ねんごろに話を聞いてそれを受け入れるように」と仰せになったというのです。

それで彼は、住んでいた伊平屋島から朝一番の船に乗り、バスを乗り継いで八時間かけて、言われた通りに筆者のところまできたわけです。私は四時間ほども費やして、神について、キリストについて、救いについてお話してあげました。聴き終わった彼は丁重に礼を言い、「自分は知らず知らずのうちに、天と地をお造りになったお方を拝んでいたのだ」

と言って、喜びに溢れて帰って行きました。

伊勢神宮を訪ねて、「何事のおわしますかは知らねども」と詠って涙を流した偉いお坊さんは、もしかすると、神様の救いに与っているかもしれません。もしあずかっていないとしたら、このお坊さんの罪による自業自得だと言い切れるでしょうか。イエス様の宣教の命令をないがしろにし、自分たちの権力と名声と金を求めて争い続けていたために、このような真面目な求道者に、天地の創造者を告げ知らせることができなかった、当時の教会の罪はどうなるのでしょう。

日本にいて、日本人の宗教感覚も神道も真剣に理解しようとせず、ただ一方的に「偶像礼拝」と非難し、糾弾し、断罪してきた結果、私たちは多くの日本人を福音から遠ざけてしまいました。この私たちの過ちは、いったいどうなるのでしょうか。

イスラエルの民は、神から与えられた使命を果たすことができず、その使命は彼らから取り去られました。そしてその使命は、新たにキリストの御体とされた教会に託されました。しかし、その教会が十分にその使命を果たしているとは言い難いのが現実です。

神は、教会の怠慢に対しても、黙っておられる方ではありません。必要とあらば、教会の中から新たな器を起こし、また異なる形でそのご計画を実現なさるお方です。私たちは、自らの立場に安住することなく、真摯に悔い改め、与えられた使命に立ち返らなければなりません。